

三号館に来て、また去るとき

酒井彦一（生物化学教室）



理学部三号館に助教授として赴任したのは1967年9月16日ですから、数えてみると24年程前のことになります。東京都立大学、カリフォルニア大学、コロンビア大学の各研究室、さらには東大に来る直前まで研究生としてお世話になっていた名古屋大学理学部分子生物学施設も決してきれいとは言えませんでした。理学部三号館も相当によごれていて、“やはり仕事をする場所だ”と感じたことを憶えています。当時はそういうものでした。まだ、江上不二雄先生、小倉安之先生、高宮篤先生がご健在の頃です。翌年にはすぐ三号館の運営幹事を押しつけられ、同じ三号館の住人である地球物理学教室と天文学教室の幹事の方々と知り合い、その年度に始まった三号館の第四期増築工事で苦労を共にしました。その頃の三号館の前はまだ広々として、ソフトボールの出来る“庭”を有しており、健康管理には優れた環境であったように思います。

東大に来て間もなく、今でも記憶に生々しい大学紛争が起り、激しく巻き込まれました。振り返ってみると、大学における教育と研究はどうあるべきか自分なりに真剣に考えた時代でした。本郷キャンパスの中で行われた何回かの学生同士の衝突、その間に割って入る教官団の苦悩と苦渋に比べれ

ば、1964年頃にカリフォルニア大学パークレー校で起っていた Free Speech Movement はおだやかなものでしたので、日米間で大学紛争にこうも際立った相違をもたらしたものは何か、ずいぶん考えさせられたものです。生物化学科では、大学紛争が見掛け上取捨に向かう頃に、五講座のうち四講座の安藤、江上、小倉、高宮の四先生が同時に定年退官されるという困難な事態があり、更に一年ほど揺れ動いてから研究教育上の定常状態が戻ってきました。教室主任として幾つかの決断を迫られましたが、たまころがしてひそかに鍛えた体力が物を言ったようにも思っています。

昭和6年生まれ私共の大学院学生時代は、まだ日本国内で行われる国際会議が今ほど多くない頃でしたし、また、四年、五年以上の留学経験を積むのも珍しくはありませんでした。今では、基礎科学の各分野で日本のレベルが著しく高まり、国際的に先導している分野が増えているので、研究室間の国際共同研究も若手の短期間の交流で十分に事たりる傾向が強まっています。それは、老朽化した大学の設備を使って、努力を積み重ねてきた日本の研究者集団と、以前よりは充実されつつあるポストドク制度（日本学術振興会特別研究員制度）による若手研究者の育成によるところが大きいと思われます。しかし、一方では、大学院の魅力の無さが、有能な人材を逃していることも見逃せません。この問題は米国の一部の研究分野ではかなり深刻な問題となりつつあるように聞いています。米国の私共の研究仲間から、日本のポストドクが欲しい旨の依頼が頻繁にきているのは、日本人のポストドクのレベルの高さが評価されている一面とともに、米国のポストドクの人口減と研究能力のレベル低下を物語っているように思われます。

米国ITHを二、三年前に退官されたP.G.Condriffe博士が一昨年の11月に来日し、日本の研究室とそこで行われている基礎研究の内容についての調査を行っていきました。この二、三年間に国際的なポスドクフェロシッブは急増していますが、米国のポスドクがこの制度をあまり活用していない傾向があります。これは、米国のジャーナリストによる日本の研究機関の紹介に比べて、日本のサイエンスそのものの紹介が少ないことに一因がありそうです。そのような討論の中でCondriffe博士も、米国の人材が企業に流れすぎ、大学院に優秀な学生が残らない傾向を認めていました。日本の理系の大学院では、まだ米国ほどではないにしても、これから東京大学が大学院重点大学として、国内のみならず国際的に若手研究者の育成を目指すならば、大学院をもっと魅力あるものに創り変えてゆく必要があります。そのためには、国際的に最先端の設備と広い建物を備え、それを支える事務機構を整備充実させるために人員を増やし、新たなプロジェクトに直ちに対応出来る柔軟性を付与する必要があるのではないのでしょうか。第八次定員削減を更に大学に適用するなど、とんでもない話です。

もう一つ、理学部がこうありたいと願っていることがあります。米国の東海岸マサチューセッツ州のウッズホールにある海洋生物学研究所には、夏になると毎年大勢の研究者が集まり、そのカフェテリアはあたたかも研究上の社交場を呈する感があ

ります。明治生まれの先生方は、“昔のウッズホールは家庭的でもっとよかった”と言われますが、現在でもラフな服装の高名な先生方と学生たちがカフェテリアで議論を楽しんでいる光景に出くわします。分野と年齢が異なり、様々な発想の入り混じる集団は、理学部ならではと思いますし、若い学生が分野の異なった先生方とも自由に話合いがもてる場を大学が提供できれば、それ以上の教育効果はないと常々思っています。その意味でも、理学部の各学科が一つの建物に集合するのは重要です。

さて、これまでの研究課題について一言述べさせてもらいます。長年、卵細胞を眺め、その細胞分裂のメカニズムに思いを巡らして来ました。一見単純そうにみえる現象の中に、生物の何十億年にわたる進化の道筋があり、とても二、三十年の間に総合的に解決できる課題ではありません。細胞周期が回るための細胞内の連鎖反応の中から取り上げたごく限られた反応系について調べ、それなりの成果が得られたことに満足しています。それも、研究室の有能な若手の努力によるところが大であり、24年間その時々に応じて苦労をともにした仲間に関心から感謝します。

最後に理学部の教授会メンバーの方々を始め、縁の下の支え役として頑張っておられる事務部の方々、特に一号館中央事務部と三号館の職員の方々に厚くお礼申し上げ、理学部の一層の発展と、大学院重点化構想の早期実現を切に期待します。

